

「古道をゆく 関屋峠」

タウンウォッチャー 上坂佳子(関屋)

今日、私達が何げなく歩いている「道」。その道のなかには昔から多くの人々が往き来し、長い問物資や文化の交流に役立ってきた古道のあることを、現在の人達はもつ忘れ去っているように思われる。古くから村と村、村と町を結んでいた街道には、早く目的の場所に到達するために、山地や丘陵ではその鞍部を越える峠道を開いて、人々の往来に利用してきた歴史がある。その古道が、私達の暮らしが近年急速に変化し、どんどん開発が進んで、立派な道路が敷設されトンネルが掘られて、その面影をひそめ荒れ果てようとしていく。

日毎に発展する香芝市内にも、昔の道筋をほとんど失うこともなく今も残っている古道がある。私はその一つ「関屋峠」の道を、今回歩いてみることにした。

近鉄大阪線「関屋駅」の北部の丘陵には、大阪のベッドタウンとして大規模な住宅地が広がり、その景観は以前のこの地を知る人にとって、大変な変わり様だと思われる。

青葉台のF公園のベンチに座ってみると、南側にくっきりと二上山を仰ぎ見ることができ、私の心をやさしく包んでくれる。この二上山は、約一三〇〇万年も

前に噴火を始め、その後何度も噴火を繰り返し、現在の美しい山容を造りだしたといわれている。噴火のとき噴出したサヌカイトは石器の材料として長い間人々の生活を支え、流出した凝灰岩は古墳や寺院の築造、石仏や仏塔の製作に用いられたという。



献花に感じられる深い信仰心

F公園の北側には大学のグラウンドがあつて、その手前のなだらかな砂利道を登って行くと、バイクが止めてあり、何人かの人がそこから古道を歩いているようにも思えた。ここから、関屋峠を越える古道の面影がよく残され、道幅も急

に狭くなり、山腹を縫うように峠の上の方へと旧街道が続く。途中、右手少し奥に「関屋地蔵」と呼ばれている石仏が祀られ、この道の往来が頻繁であった頃に旅人の安全を祈願して造立されたものだろうか、供えられたきれいな花を目の当たりにし、今日まで受け継がれている



旧街道の面影を残す関屋峠

石仏への信仰の深さに心が打たれた。石仏の祀られているところから少し登ると平坦な道に出るが、この辺りから河内の平野が一望できる国分のぶどう畑の手前まで、割合に道幅の広い本来の旧道の面影が偲ばれる古道が続いている。

約三十分ほど歩いただろうか、正面に河内平野がひらけ国分の町並みが眼下に見えるぶどう畑のところに到着した。この辺りでは大阪側の眺望がすばらしく、眼下の国分の町並みは勿論のこと、悠々と流れる大和川、点在する河内平野の古墳、高安山から信貴山への山並みなど、関屋峠を越えて歩いた者にしか体験し得ない感激である。

ぶどう畑からは、舗装された道が、国分本町の方へと続いている。この道筋に古い道標が立っていて、「左たつた、□□山、右たぬま、はせ、よしの」と刻まれ、関屋峠を越えると「たぬま、はせ、よしの」に至ることを旅人に教え、遠く伊勢に通じている道であったことが分かる。

私の住んでいる関屋は、この峠の東、大和側からの入口にあたるところで、古い歴史をもつ村だと聞いている。この関屋越えの古道は、今日開発された住宅団地のところを通過して関屋駅の東に通じていたのだが、現在の関屋北七丁目から六丁目の東側に古道の一部が残されている。大昔から河内と大和を結び交易や文化の通路となってきたこの古道を、歴史の生き証人として、私達は大切に保存し、後世に伝える責任があるように思えてならない。